

骨に残されたもの

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 シイラ(魚)の骨出土状況(三条せと物や跡)

はじめに 遺跡の発掘調査をしていると様々な遺物が出土します。土器や瓦、木製品や金属製品をはじめ、動物遺存体と呼ばれる骨もそのひとつです。少し光の当たりにくい存在ではありますが、生命が残したものであり、今回は注目してみようと思います。

骨の主成分であるリン酸カルシウムは、日本の酸性土壌では残りにくく、多くの場合、時間の経過とともに骨は土の中で滅失してまいります。したがって、発掘調査

で骨が出土することは幸運なことといえるでしょう(写真1)。

京都市内の遺跡から出土する骨にはヒトやウシ、ウマ、シカ、イノシシといった哺乳類、大小様々な鳥類や魚類などがみられます。そして、出土骨にはたくさんの大切な情報が残されています。遠隔地との交流を教えてくれる骨もあれば、食文化や産業といった生物の利用を物語る骨もあります。また、目に見えない情報も多く、それらを読み解くための研究が行な

われています。

骨が出土する遺跡 骨の情報は骨そのものからだけではなく、出土状況からも得ることができます。人の場合、災害などで突発的に死亡する場合を除けば、多くの遺体は墓に埋葬された状態で見つかります。これには野辺に放置された遺体の骨は様々な影響を受けて残りにくいことが反映しています。

一方、ほかの生物の場合は飼育動物が埋葬された例もあれば、食用や骨革の加工で出たゴミとして

廃棄されたものもあり、人と生物との関わり方によって様々です。例えば、京都駅北西に位置する平安京左京八条二坊十四町跡では、室町時代から江戸時代にかけての墓地があり、人の墓に接して犬を埋葬した墓が見つかりました。11基の墓からは24体分の犬が確認されています（写真2）。そこには、解体した犬の骨を並べて埋葬した墓や、骨が元の位置を保ったまま、丁寧に埋葬されたとみられる墓も見つかりました。前者は食用にされた可能性もありますが、いずれも人のように埋葬されていることから、当時の人が犬に対して特別な感情を抱いていることがわかります。

また、油小路通と鯖菜師通の交差点南東側では、江戸時代前期のゴミ捨て穴から哺乳類・海産魚介類・鳥類の骨が出土しました。この場合は明らかに食用とされ、捨てられた骨であることがわかります。海から魚介類が運ばれていた事実から当時の食文化のひろがりを見せてくれます。

骨に残された情報 目で見て骨から読み取ることのできる情報には、生物種や性別、体格、おおよその年齢、特定の病気やケガ、栄養状態などがあります。ほかにも、武器による受傷の痕跡や、動物を解体した時の刃物痕が残る骨もあります（写真3）。

一方、目に見えない情報は理化学的な分析を行なうことで知ることができます。よく知られているDNA分析では、生物種や性別、血縁関係がわかります。また、骨



写真2 犬の骨出土状況（平安京左京八条二坊十四町跡）



写真3 刃物痕（白破線部分）のある鹿大腿骨（富ノ森城跡）

に残されたコラーゲンを利用する炭素・窒素同位体分析では、死亡する少し前から過去10年の間に摂取したタンパク質を知ることができ、食生活を語ります。近年の研究で注目されているストロンチウム同位体分析では、骨に残るストロンチウムから、生活していた土地がわかり、人や動物の移動を知ることができます。ほかにも、放射性炭素年代測定によって死亡し

た年代を知ることでもできます。

おわりに 以上のように、出土する骨には、具体的な生々しい情報が秘められており、それらは今に語られている歴史を肯定することも否定することもあります。今後も研究は進み、読み取ることのできる情報はますます増えることが期待されます。歴史を覚えてもらう我々は骨に対する敬意を忘れてはなりません。（関 晃史）